

## 生徒の自己肯定感を高めるために

地域の皆様にはいつも本校及び生徒を温かい目で見守ってくださり、心より感謝申し上げます。

お陰様で、生徒も明るく生き生きとした表情で学校生活を送っています。去る10月12日（金）には、平成29・30年度大田区教育研究推進校として、「『分かり方の特性』を生かした指導のあり方～理科教育を中心に～」の主題で研究発表会を行うことができました。生徒が学習内容を「分かる」ことから自信をもち、自己肯定感をさらに高めてほしいと願う次第です。

自己肯定感とは、本人の実力だけで達成できるものではありません。かかわるすべての皆様からのご指導・ご支援を得て、その内容を自分なりに咀嚼し、自分の果たすべき役割を実行して、はじめて自己肯定感は自分の内面で醸成されるのではないでしょうか。

地域の一員として、地域の皆様に感謝しながら、地域主催の行事等に計画的に生徒が企画・参加することを通して、生徒の潜在能力が発揮でき、社会性も育つものと考えております。今後とも、ご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

（上池上・大森第十中学校長 飯島睦子）

## 「心」を感じる地域 雪谷・石川台

2019年、平成最後の年を迎えました。今年は亥年ということです。この年は「無病息災」そしてイノシシのイメージから「猛然と突き進む」ことを表す年と聞いたことがあります。皆様にとってそのとおりの良い一年となることを願っています。

さて、私は「学校には、感動がある！」と強く感じています。その「感動」は、自分自身で考え、前向きに活動し、やりきることで得られるものだと思っています。また、そういう姿は、他の人の心を動かすことができると思っています。

私は今年度の4月に石川台中学校に赴任しました。生まれたときは大田区に住んでいました。ご縁がある大田区です。この地域にお世話になって、日々、地域の皆様の「心」を感じています。まさに、「地域には、感動がある！」というわけです。

子供たちは、地域のボランティアに参加したり、防災訓練に参加したりして地域での自分の役割を考え活動しています。学校では教育活動全体について「感動」ある学校づくりに努めます。そのことが地域に広がり皆様に元気を与えることができればと思っています。

（雪谷石川台・石川台中学校長 村上昭夫）



## ゴミを作っています…？

とある食品メーカーで商品のパッケージ（容器・包装）に携わる仕事をしています。商品のパッケージは中身の保護や商品説明などの役割があり、無くてはならないものです。

昔、豆腐などは豆腐屋さんがラッパを吹いて“トーフー、トーフー♪”と家の前まで売りに来て、ボールや鍋をもって買おうに出ることもありましたが、現在ではパッケージの無い商品はほとんど見かけなくなりましたね。

そのパッケージですが中身を使ってしまうと皆さんはどうしますか？おそらくゴミとして捨てているかと思われます。

環境省によると家庭から出るゴミのうち容積比で約6割が容器包装廃棄物となっているようです。

そこで、20年ほど前に「容器包装リサイクル法\*」という法律が出来ました。容器包装廃棄物を資源として有効利用することで、ゴミの量を減らそうという法律です。現在、缶や段ボールなどはすでにリサイクルが進んでいるので対象外ですが、ペットボトルやビニール袋などは対象となり、対象となる資材を使ったパッケージで商品を作っているメーカーはその量に応じてお金を払っています。

「容器包装リサイクル法」において私たち消費者の役割は、住んでいる地域のルールにそってゴミを分別し出すことです。

ゴミの分別は面倒なことかもしれません、分別によってリサイクルが進めば企業が支払うお金が減るかもしれません。そうしたら商品の値段も下がるかもしれませんよ。

\*正式名称「容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律」

（東雪・Y.T）

### \*\*編集後記\*\*

初春のお慶びを申し上げます。

平成ラストの年頭のご挨拶です。

父の好物のキンツバを戦友に分けたというお話に、目頭が熱くなりました。戦後73年これからもズーッと平和でありますようにと、心を引き締めた八巻さんの一文でした。

昨秋淡路島にある太平洋戦争で戦没した14歳から22歳の男女20万人の学徒の御靈をまつる碑に手を合わせて来たばかり、多くの尊い命の犠牲の上に今日の私達の幸せがあるのだと改めて胸に刻みました。

編集はこれからも地域の潤滑油として、皆さまの声を思いを巾広くお伝え出来ますよう張り切って参ります。

今年もどうぞよろしくお願ひいたします。

（池の台・柏 三八子）

ふれあい雪谷（創刊・平成2年（1990）12月20日）年4回発行  
(1月・新年号／4月・さくら号／7月・あさがお号／10月・もみじ号／の1日発行)  
[発行日] 平成31年（2019年）新年号 1月1日（通巻・第113号）発行  
[発行] 地域力推進雪谷地区委員会 [編集]「ふれあい雪谷」編集委員会  
[連絡先] 雪谷特別出張所  
〒145-0065 大田区東雪谷3-6-2 電話3729-5117 FAX3729-1826  
[http://www.city.ota.tokyo.jp/chofu/ts\\_yukigaya/index.html](http://www.city.ota.tokyo.jp/chofu/ts_yukigaya/index.html)

ふれあい  
雪谷

平成31年1月 新年号 通巻第113号



切り絵  
小池・小山澄雄さんの作品

[編集委員]  
笹丸・森信 節子／雪谷石川台・倉田 清子／南雪谷・河野 洋一郎／  
東雪谷東中・秋山 一雄／池の台・柏 三八子／小池・原 龍興／上池上・船山 康夫

## 私にとっての外国

私は、タオルで有名な今治市と、道後温泉や坊ちゃんで有名な松山市の中間にある愛媛県越智郡菊間町で昭和21年に生まれ、外国など考えられない環境で育った。

初めての外国との出会いは、中学2年生の秋の放課後、バスケットボールの部活練習をしていると、コートの横で中国人のような方々(8名)が見学に来て「バスケットの試合をしたいが?」と英語で話しかけてきたときである。町内の太陽石油(株)がソ連と石油輸入契約をしたが、1隻分しかないタンクに10隻のタンカーが送られ、沖で停泊した各国の船の乗組員が散歩の途中に学校に立ち寄ったようだった。試合後「皆さんバスケットボールが上手ですね」とお世辞を言われ、嬉しかった。中学校1年の時だけ通った塾で、3年生までの教科書を丸暗記させられたせいか、会話には殆ど困らなかった。

次の外国との出会いは、高校卒業後に進んだ専攻科の航海訓練所での、練習船によるタヒチ寄港であった。最初に上陸したのは日食観測隊を乗せて観測機器を運んだ、タヒチから3日程手前の無人のハーベイ島だった。10日ほどの航海の後に見る木々の緑がまるで別物のように新鮮に見え感激した。浅くなつたサンゴ礁から砂浜へ機器を積んだボートを押し上げると、砂浜へ仰向けに倒れ込んだ。そよぐヤシの木、真っ白い砂浜、大きなアコヤ貝の貝殻、ヤシの実、コバルトブルーの空。「時間よ止まれ!」と叫びたくなった。

タヒチ島では情熱的なタヒチアンダンスを見学したあと、側にいたフランス人らしき男性の自宅へ友人3人と招待され、南国のフルーツやクッキーと紅茶を頂いた。フラメンコギターがプロ並みの友人が招待のお礼に演奏すると、ご主人もさらりと「禁じられた遊び」を弾いたりした。

次の寄港地のアカブルコではケブラダで45mの岩の上からのダイビングなどを見学した。また、沢山の本船見学者を案内したが、メキシコシティからお婆さんと一緒に遊びに来ていた19歳の女学生が随分熱心で次々と質問をしてきた。翌日も訪ねて来て「お茶を飲みに行きましょう。」と強引であった。お婆さんはにこにこと見守っていた。お茶の後二人で色々話していると、情熱的な瞳に吸い込まれそうになり、いつの間にかしきり手を取り合ってしまった。「もう帰らないといけない。」と言うと、涙を流し自分のイニシャルの刻まれた指輪を外し、驚く小生の指にはめた。出帆を岸壁で見送る彼女とお婆さんにいつまでも手を振った。あの指輪は今どこへいったのか・・・。

注) タヒチ:

南太平洋フランス領ポリネシアに属するソシエテ諸島にある島

アカブルコ:  
メキシコ太平洋岸のグレーロ州にあるリゾート都市

(希望ヶ丘・長井武志)

## 羽田空港 40数年前の記憶

1974年、6歳の時に父の転勤でカナダ・トロント市へ引っ越しました。先にトロントに渡った父に遅れること約3ヶ月、家族で初めて海外へ居を移すという、当時ではかなり珍しい体験をまさにしようとしていました。英語のほぼできない母と3歳年下の弟、そして私の3人で当時の国際空港であった羽田に向かいました。

飛行機に乗って海外赴任など珍しい時代、万歳三唱しかねない勢いで祖父母、叔父、叔母、いとこと親戚一同が見送りに来てくれました。チェックインを済ませ、出国審査を過ぎたエリアに、今では見かけなくなった渡航者と見送り客がガラス越しで会話するための場所がいくつありました。まるで、アクリル板越しに拘置所で接見する様なあの仕様です。私たち家族の横にはフォークデュオの「あのねのね」が黄色い声援をあげ見送りに来ていたファンと接見、もとい、触れ合っていました。私たちは親戚一同と時間一杯まで(たぶん)会話していました。祖父に至っては耳も遠くなりおとぼけキャラでしたので、

祖父 「どこに行くの?」と、この期におよんで質問。

私 「カ・ナ・ダ」と大きな声で伝えると

祖父 「金沢か!」

と、最後まで私たちが金沢に引っ越すと思っていたようです。

それから5年半、カナダに滞在し、父が任期満了で日本への帰国が決定しました。帰国時、降り立った空港は成田。その3年後にはまた父の転勤で西ドイツへは当然往路も成田。社会人になって海外旅行や出張の空港も成田。海外渡航=成田が当たり前の図式でした。

それから時が過ぎ、2000年から海外へ行く機会もほぼなくなったのですが、ここ2、3年でまた海外出張が増え、羽田から海外出張に行く機会に恵まれました。今や大田区民として、そして羽田の国際線ターミナルから海外に行くということが、実に感慨深かったです。今でも旅立つ度に自分が6歳で初めて海外へと旅立った記憶が蘇ります。

雪谷の住民としては蒲蒲線の動向が気になりつつも、これから2020年に向けてますます活躍が期待される羽田空港。この原稿を書いている本日も羽田からサンフランシスコへ出張に旅立ちます。

(東中・フォスター・ヘンリー弘恵)

### スポーツ健康都市宣言記念事業 第35回大田区区民スポーツまつり 雪谷地区9自治会スポーツまつりのご報告

平成30年10月7日(日)雪谷小学校にて今年も雪谷地区9自治会スポーツまつりが開催されました。今年のスポーツまつりは、天候にも恵まれ、小さいお子さんから年配の方まで1000名を超える方が参加し、大いに盛り上りました。

優勝: 東雪谷東中自治会 準優勝: 上池上自治会 第3位: 南雪谷自治会  
たくさんの参加、ご協力ありがとうございました!!

## 父と母を想う

山梨県のハケ岳の麓にある文久年間から続く造り酒屋の五男に生まれた父は、昭和12年、東京に販路を広げようと雪谷のみゆき通りの先に酒の小売店を開業しました。その頃は、1両編成の池上線が松林ごしにトコトコと走っているのが店頭から見えていたそうです。

父は、昭和12年に同郷の代用教員であった母と結婚して一女も授かり、幸せな日々を過ごしていたのですが、時は変わり昭和19年1月、車の運転免許を持っていた為に特殊技能の補充兵として33歳で陸軍に召集されました。母はその時臨月で出征する父を見送ったとのことです。

1ヶ月後に私が生まれ、跡取りが生まれたという事で一泊二日の休暇をもらい帰ってきた父は、私と姉をそれぞれに抱き上げて大変嬉しそうだったと聞きました。翌日連隊へ帰る時に、ゲートルが上手く巻けないと何度も何度もやりなおしていました。少しでも長く家に居たかったのでしょうか。

その年の夏、父の連隊は清水港から南方に送られる事になり、母は私をおぶい2歳の姉の手を引いて、静岡の磐田町の連隊へ混雑する列車にもまれて面会に行きました。当時大変貴重な砂糖を手に入れて、父の好物の菓子、キンツバをいくつか作って持つて行つたのです。

中庭で包みを広げてさあ皆で食べようとした時、父はろくに口にせずに、そばを通る兵士に「あいつらは家が遠くて家族が見送りに来られないんだ。」と云つて配つてあげていました。

戦後、「昭和20年7月、比島サンミゲルにて戦死」という公報が届きました。骨箱には小さな位牌が入つていただけです。あの敗色濃い時期に、船はよくもフィリピンまでたどり着いたものだと思います。キンツバを食べていた戦友達は無事生還できたのでしょうか。

(南雪谷・八巻忠重)

## チコちゃんに叱られる

ゲストに質問して答えられないと“ボーッと生きてんじゃねーよ”の名セリフ。

今話題のNHK番組“チコちゃんに叱られる”である。毎回楽しみに見ている私も答えられないと、その名セリフが胸を刺す。目まぐるしく変わる世の中に分からないことが多すぎて、分からないままにしていることが多い。向上心や探究心が薄れてきている。それではいけないとスマホに頼る。すぐに調べられるが、すぐに忘れる。

つい先日、三浦雄一郎さんがアコンカグア(6,960m)を目指すとのニュースに驚いた。冒険家といえども86歳である。勿論日々の鍛錬をかかさず、やる気・勇気・諦めないとコメント。そのコメントを聞きながさず、今の自分に出来ることに挑戦してみたい。“ボーッと生きてんじゃねーよ”と日々心しているこの頃です。

(笹丸・齋藤富美子)

